

<資 料>

# 翻訳：ジョン・プリブル(著) 『ウスター号事件，エディンバラ，1705年』

渡 辺 邦 博

## 訳者 序文

本稿は、John Prebble: *The Darien Disaster*, Mainstream Publishing, Edinburgh, pp.366, 1968. の第一章冒頭部分の翻訳である。翻訳稿に相当する部分の内容から、仮に「ウスター号事件」と題名を付したのは訳者である。稿末の年表の1705年に発生した事件が本稿の内容に該当する。

付録として本書の巻末に収められている主要「人名録」と「年表」をも翻訳した。

## 第一章 気高い事業

「それだから、イングランドは、その裏切りに対して哀悼を示すべきだ。」

1705年4月，エディンバラ

城壁の上で、**人々の野蛮な声**が聞こえた。半月要塞の歩哨たちと、公邸の庭に整列した警備隊の一団は、明け方からそれに耳を峙てていた。砲台の銃眼から、青いピートの煙や細い光線越しに、高い煙突と餌台のある破風の向こうに、彼らには、ランドマーケットからアビー・クロウスにかけて、激しい流れが見えた。そうだ、人が、婦女子が、馬が、馬車が、ひっくり返った馬小屋が、窓や階段の前にいる泡立つような白い顔が。金切声や卑猥な言葉が

次々やって来る中で、「執行延期には反対」を引切り無しに叫ぶと、繰り返す毎にその意味を失ったが、その激しい脅威は残っていた。城の大ホールの下にあるアーチ状の監獄では、人間の鼓動や、引切り無しに続く看守の足音以外には何も聞こえず、トマス・グリーンの自信を揺るがすものは何もなかったであろう。彼は監視員に微笑みかけ、おまけに、自分とその仲間がその日に命を失うことはないと言った。女王陛下の急使がロンドンから到着して、絞首台の真下であっても、彼らの命を救うのだ。高等海事裁判所の裁判官や査定人から、判決が言い渡され、「いまわの言葉」が校正の手で印刷屋に手渡されても、その若者が、絞首刑が必ず起こるなどと誰かが口にするのを認めるはずがない。

しかし、絞首刑は、その朝には正義と同じ意味のことだったし、60もの毛細血管のような空き地や路地からやって来て、その町の主要幹線に溢れた群衆たちからあからさまに要求されていることだった。エディンバラの6つの門に通ずる道路の全部をいっぱいにしていたのは、50マイルも歩いてやって来て、こん棒や剣で武装し、国民の傷ついた自尊心や流された血の報復を力づくで要求する人々であった。その町に入るために争うのではない人々が、北ではコレッジ・カークの、東ではウォーター・ゲイトの側で、町から出ようとする人々と言い争っていた。ここでは、二つの道路がカールトン・クレイグを取り囲み、リースへと続いて、それぞれが平民たちと上流階級の人々であふれていた。東側の道路に沿って、昔からの泥の壁で覆った公園やまだ早いオート麦の緑がピンと立った畑があり、群衆が集まっていたが、バラバラになった歩兵や騎兵たちによる統制には力がなかった。この道を通って、刑を宣告された海賊たちが慣習に従ってリース砂浜まで連行されるが、高潮線の上で北を指している、草が繁茂した砂丘の上では、二週間前から絞首台が、トマス・グリーン船長と、その仲間のジョン・マドラー、そしてイングランドの商船ウスター号の砲手ジェームズ・シンプソンたちを待ち受けていた。かりに彼らが絞首刑にされるとして、彼らが吊るされる前の最後の場所は、彼らの船が座礁して、その船倉と船室が全壊し、その帆柱か

ら帆と帆桁とを失った、フォース湾の5マイル向こう側にあるバークトアイランドの白い屋敷であっただろう。

閉鎖されて、警護が配置されたアビー・クロウス門の背後にある、ホリールード宮殿では、夜が明けると直ぐに女王陛下の枢密院顧問官がいく人か集結していた。彼らは、コウゲイトかキャノンゲイトにある自分たちの別邸からか、郊外にある自らの住まいから馬車でやって来て、その後レイの国会議事堂にある枢密院会議室に通ずるロイヤル・マイルを進んで、結論を出す必要があった。すなわち、3人の船員を女王の助言に従って死刑の執行を猶予とするか、人々が望むように、海賊行為を働いたとして絞首刑にすべきかであった。彼らの誰にしても、出向いてくるのに不安をいだいてはなかったが、彼らがホリールードに着くことは、恐ろしいほどであった。四角に削られた石材からできた素晴らしい風格のある建物の間にある、キャノンゲイトの大通りは、怒り狂った男や女で一杯だったが、彼らは、馬車を取り囲み、馬勒につかまり、焼失した羽目板をハンマーで叩き、窓や皮のカーテンから真っ赤になった顔を突き出して、「執行延期はなしだ」と叫びながら、顧問官たちに唾を吐きかけていた。こうなると、ネザーバウ・ポートと国会議事堂の間にあるハイストリートに、材木の山や、群衆が言いたいことを主張するお決まりの武器であった、ピートや糞尿の臭いが蔓延するのは避けられないように思われた。こんなことでは、女王の主だった臣下の人たちが冷静な結論を出せるような空気ではなかった。

30名の枢密院のメンバーのうち、19名がみずから不在を決め込んでおり、一月前の裁判以来、その人たちはほとんどの枢密院の会合には欠席であったので、何ら決定はなされない。トウィードデイル侯爵は、自分の名誉にかかわるところでは怒りっぽく、大方の評価を鼻にかけているが、家の事情で所領にいたので、彼がいなくとも枢密院の定足数は満たされると言われた。群衆の音楽に合わせて歌を歌うのが好きで、意気軒昂な愛国者だったベルヘイヴン卿は、屋敷に溢れるばかりの客のため仕事があると前もって願い出たので、今回は、おそらく筋が通らない訳ではないが、食事療法を慮って

ベッドに居なければならぬということであった。例に漏れず病気持ちであったクロウフォード伯爵は、「ひどい風邪引きで、声が嗄れ」たので、会話ができなくなってしまった。スコットランドにおける女王陛下の國務大臣の一人、ロックスバラ伯爵は、階下に歩いて降りることができれば、町にも出たのだが、「ひどく捻挫をしたため、私が何時になったら歩けるようになるのか分からない」と、書面を寄越した。司法書記卿オーミストンのコックバーンは、一介の弁護士でも当然と思われる程の小さな想像力さえも示さなかった。自分の息子が最近西の国に行ってしまったので、馬を全部出払ってしまった、と言うのが彼の言い分であった。このような嘘八百で、お偉方たちが公職と個人的な評価を護るのに汲々としていたので、彼らの義務などはあってもなかってもよくなったのであった。

後にして思えば、法的にも普通の人間性からみても、その義務は明らかである。グリーンとその乗組員に対する証拠の出所は、大酒の上での飲んだくれの法螺話であり、起訴事実にしても、被告人と陪審員にとっては不適切で、理解できない、中世のラテン語や法律訛で罫にかけれたようなものだった。弁護を行った7名の有名な弁護士たちは、何ら証拠を提示してないように思われ、裁判の後でなら普通に行われる公刊物での論述を提案しておらず、自らの身の安全をあからさまに恐れて、即座にエディンバラを立ち去った。裁判官が、起訴状にある法令や古典からのくどい引用の意味について、いくつかの疑いにざっと答えた後で、締めくくりをしたとも、陪審員に対して法律の上での指導を与えたとも、記録が存在しない。5名の船長と10名の商人たちから構成された陪審員の誰もが、およそ公平無私とは考えられなかった。事実、その時点でスコットランドでそうした人間を見つけるのは困難であったろうから。そうではあっても、彼らのうちの少数は、法廷の外の群衆には耳を貸さず、有罪の評決に同意できなかった。枢密院顧問官たちは、このすべてを一か月にわたり見聞きしていた。それだけでなく、今や彼らは、グリーンが略奪と放火の廉で起訴されたとされる、スコットランド船スピーディ・リターン号の船員たちがロンドンで宣誓した供述書を目前にし



ていた。彼らがウスター号の乗組員たちに罪がないと明確にしていたにもかかわらず、顧問官たちは、それらが「たんなる証言のひかえ」だとのまことしやかな説明によって、それを棚上げした。女王からの緊急の要望に対しては、ただし感情的な抗議のゆえに、その到着の時点で、顧問官たちはすでに刑の執行を当日、つまり4月11日まで延期していた。彼らはアンに対して、「これ以上の延期は許されない」と懇願していたが、彼らはすでにその前日、死刑執行に賛成の票を投じていた。だが、おそらく彼らにとって救いだっただろうが、完全な多数派の形成に成功した訳でもなかった。不在を決め込んだ19名とは異なり、この11名は、少なくとも、決定は避けられないと信じていた。しかし彼らは、良心と便宜、抗し難い執行停止を意味するロンドンからの急使が今朝には到着するはずだと言う認識と、外にいる群衆は絞首刑以外では満足する訳がないとの実感との間に、押さえ込まれていた。

群衆には、義務や法律、あるいは良心によって、その感情を合理化する責任は、おそらくまったくなかった。その気分は、いつでも瞬時に激昂するのだが、スピーディー・リターン号の所有者であるスコットランド会社の悪意を持つ書記ローデック・マッケンジーが作成したバラードによって、これまでになくのぼせ上がらせられ、あるいは奮い立たされた。無責任に想像力をかき立てる醜惡な詩には、ロバート兄弟やトマス・ドラモンドのような、あの船の船長や積み荷監督者が、＜西＞インドの大海に叩き込まれる前に、どのようにして、手足を拘束され、首をはねられたかが綴られていた。罪のないスコットランド人たちが、イングランド人の裏切りで殺害された事実は、余りに不当だったので、犠牲者が、パナマ地峡におけるスコットランドの素晴らしい植民地の生き残りで、ダリエンの英雄であった二名の男たちだと言うことでは、さらに不愉快だったのである。そして、その破壊がイングランド人たちによって行なわれたことも、群衆は記憶を新たにしていた。

9時前にホリールードの門が少しだけ開かれた時、差し上げられた拳やこん棒の間で、何枚ものバラードがひらひらしていた。大法官の職杖持ちが現れ、まるでそうした行列に対して普通なら対応される表敬の万歳によって歓

迎を受けるのが当然であるかのように、勇ましく進んだ。ロビンスン大尉配下の警備隊に属する40名のマスケット銃兵が、いらだつ馬のどちらかの側に固定された銃剣を帯びて、金びかの馬車で行進した。先頭を進んだのは、フィンドレイタル伯爵、シーフィールド伯爵であった、ジェイムズ・オウグルヴィ大法官だったが、その人は、穏やかな表情と優しい微笑をした、気取らず、立派な出で立ちであった。彼は、本心を隠すために、要塞に向かった側では、カーテンと外罌を使った。伝わっている限りでは、その最大の力とは、いささかも説得を必要とせず、国王の歓心を買うためには何が必要か、を知る能力であった。昨日、これに当然のごとく導かれて、彼は執行延期の側にたった投票を行なったが、他方において彼は、女王の当面の意思を尊重すると、彼女からの将来の引き立てを危険にさらすかも知れないことに気がついていて。「われわれは皆、国会における女王陛下のご関心事を大きく損なうことになるかも知れないのを知るべきである」、彼は枢密院での事前の会合後、次のように記した。「私はすべての者に語りかけなければならない。神がこの世であの野蛮な殺人を発見されて以来、かりに、同胞の無辜の血を奪った者に対して刑の執行が認められるとしても、それは堪え難いことである」。

刑の執行のための目撃者としてかかわる全能の神と共に、あるいは、少なくとも枢密院のその場に於たる一員として、シーフィールドは、この朝の任務がいかに進めなければならぬかを知っていた。すなわち、もしも群衆がレイにある国会議事堂に彼が到達するのを許せばの話だったが。皮肉なことだったが、彼の勇氣はやはり、断固たるものであった。蒼ざめて元氣のない顔はしていたが、自分の馬車の金縁と皮を背にして深々と腰を下ろしながら、彼は理解していた。8年前にイングランド人と共謀して、スコットランド会社とその植民地を破壊したこと、その意味で、グリーン、マドラー、ないしはシンプソンをはるかに上回る悪漢だったと思わない人は、アビー・クロウスとセント・ジャイルズの間には一人もいないことを。

彼の衣服の外見が、つまり腕にあるオウグルヴィのライオンが門の外の

人々を怒らせた。キャノンゲイトまでの道ではどこでも、マスケット銃者に向かって人々が殺到し、シーフィールドの馬車にしがみついて、「執行延期には反対」を叫んだ。女王陛下の主だった家臣たちが、舗装道路に蹄を響かせて、ネザバウ・ポートを通ると、こんな風に野蛮でみっともないことになり、一段と暴力的な群衆の中に入ることになるのを意味していた。ここで人々は掃き溜めによじのぼり、馬車に近づくために主婦たちが通せんぼをして、一行に石やら、野菜やら、糞尿を投げつけ、女どもは窓や前階段から悪態や激励の言葉で金切り声をあげた。職杖持ちは、乱暴に彼の膝を折ったが、彼は、もしもマイルン・スクウェアとスコットランド会社の事務所によるけながらでも入らなければ、殺されてしまったかも知れない。群衆は、シーフィールドの馬車を捕まえて、その飾りを施した羽目板を棒や拳骨や、刀で叩いて、その窓に野蛮な顔を押し付け、ロビンスンの部下が振り回すマスケット銃を撃って群衆を蹴散らすまで、内部の慚然とした顔に向かって「執行延期はなしだ」と叫んだ。ゆっくりと馬車が動けるようになり、国会のある中庭に通ずるトールブースとマーケットが交差する所を通過した。ここでは建物は、ヨーロッパで最も高くなっており、そのいくつかは、あの大火以来新たに高くなったものもあって、14階に達するような場合もあり、それぞれが20家族以上も住んでいるような有様だった。それぞれの窓や、それぞれの階には、男や女、子どもたちが「執行延期はなしだ」を叫んでいた。

国会議事堂の扉が枢密院で閉鎖されている間に、群衆は、枢密院の扉に向かって、ハンマーの音を出したりふれぶみを叫んだりして、おもしろがって歌を歌ったり、喧嘩をしたりしていた。構内に入ることができなかった人たちは、城の溝に登って、吊り橋を隔てて叫び声をあげた。城内では、総督のリーヴン卿（本人の個人的な意見は、被疑者をこれ以上の審議なしに絞首刑にすべきだと言うことだったが）が、歩兵大隊と騎兵大隊にリースの浜辺に向かうのを命じて、群衆の怒りに水を差すことを決めた。彼らは、ドラムの響きでポートカリス門から出て来て、銃剣を煌めかせ、馬具をならして、

ウォーター・ゲイトやリース道路に通ずるロイヤル・マイルを下った。群衆のいく人かは放歌雀躍でそれに続いたが、大部分は、閉ざされた扉の後ろのお偉方たちに疑いをもち、そのままとどまった。

議会の大ホールの下にあった会議室では、前任者たちが有罪か無罪の決定に使用した、親指ねじ、ナイフ、ペンチなどに囲まれて、枢密院顧問官たちが2時間ほど議論を行なった。彼らの思考の外にあり、別の世界に属する群衆の騒音は、穏やかに押し寄せるざわめきであった。発言されなかったことは何もなかったが、遅れたのは、新鮮な議論があったからではなく、これまでの疑念を押さえこむ必要からであった。一端下された結論は、どうしようもないことだったが、その決定に力があつたのは、緋色や白い服装をした高貴な人々ではなく、悪臭のある口や激しい性格を持つ人民たちであった。「われわれは確信に到達した」とシーフィールドは書き記した、「いく人かが、処刑に値する最も罪が深い者だと認めること以外に、公衆を平静に保つ可能性はなかった」と。グリーン、マダー、シンプスンが、リースの浜辺に送られるなら即日で、絞首刑されるべきこととなり、ウスター号の残りの乗組員は次の週に刑の執行が延期された。

使者が城に送られた時、顧問官たちは一団となって国民に説明に向かった。シーフィールドは、開かれた状態の国会議事堂の扉のところに立って、彼らに語りかけた。彼が口にしたことは、国会構内からロイヤル・マイルの所までで、群衆によって取り消された。歓喜と歓呼の叫びがあつて、この突然の明るい雰囲気の中、顧問官たちは控えめに立ち去った。シーフィールドの馬車は、彼が嘘をついた、実はそれは全部策略であり、つまり、殺人者たちが再び刑の執行を延期される、と言う叫びがあつた時、ほとんど構内を離れることができなかった。彼は窓の後ろで前屈みになり、首を振りながら、静かに群衆に呼びかけて、満足のゆくようになるから、我慢するように告げた。石が硝子を割り、彼には破片が振りかかった。人の手が馬車を掴んで止まらせた。そして、怒った声が壊れた窓を通して叫んだ。彼らは、トマス・グリーンとその残忍な仲間たちを刑の執行に連行するか、城を攻撃して海賊

たちを生きたまま火あぶりにする積もりだった。シーフィールドはドアの取っ手を回して、それを開き、階段を下りて通りに出た。この勇気ある傲慢な行為に驚いて、群衆は彼に道を譲るためにバラバラになった。彼は静かにゆっくりと友人の家へと歩を進めた。

そしてカースル・ヒルからは、ドラムの響きが聞こえていた。ロビンソン大尉に率いられた警備兵が、乗組員たちを降ろしているところであった。彼らがランドマーケットにやって来ると、うなり声が出て、それから静かになった。イングランドの旅行者であったジョウジフ・テイラの言うには、刑を宣告された者の様子や、彼らの勇気や沈着さを目にして、多くの人は感動の余り涙を流したが、これはもっともなことだと思われる。と言うのも、あらゆる感情を経験することが、誰にでも観察できることとなれば、死と言う事態に直面して正しく振る舞うことは、立派な行為と評価され、少なからず感情的な同意を受けることになるものだと。

銃剣の谷間を歩んだ時にトマス・グリーンが平静だったのは、しかし、彼に勇気があったからと言うよりも、自分は刑の執行が延期されるとずっと信じていたことによった。彼の言うには、嘘を突き通している人なら誰でも神のお慈悲を期待できないのは、誰も否定できない真実ではないのでしょうか？彼は、控えめで、無口だが、義務には献身的な、一風変わった若者であった。数日前に書かれた彼の遺言は、マッケンジのバラードを販売したのと同じ業者によって売り出されたが、誰一人傷つけてたことはない、自ら宣言していた。「海賊の習わしが何であるかは、神に感謝するが、私は知らない。しかし、私の理解するところでは、私の原告、私の検察官たちは、あなたが、人間の前では告白する必要がないとの私の考えを信じさせてくれると理解している。私が述べたことは、よきクリスチャンならすべきことだとお考え頂きたい。もしもあなたに慈悲を行うことがないなら、あなたは過ちを犯しているのだから、私を傷つけることはできない。」彼は25歳であった。彼が21歳の時にウスター号の指揮下に入る命令を受けた。そして悲しいことに、彼は強いアルコール依存症であった。

ジョン・マダーは、彼の船長とそう年齢が変わらなかったが、おそらくもっと悲劇的な人物だった。と言うのも、彼はスコットランド人だったので、彼が忠実になってなければ、逮捕も免れていたであろう。彼は死ぬべき運命を知っていたし、グリーンのような刑の執行延期についての痛ましいほどの希望を持てなかった。彼の遺言は、物静かな砲手シンプスのそれと同様に、彼のために書かれてはいるが、いずれの人物が考えたのか、また本当に言ったことなのか、今となっては知る由もない。

ロビンソン大尉は、彼が剣と櫂を帯びて行進した時に、頭数を数えていた。彼は後になって次のように述べた。市外に集結した8万の武装した男たちがいた、と。あまりに近い数字だったので、平静なままエディンバラからリースの砂浜まで歩くことができたからであろう、と。今や死刑囚のために涙を流すものもなければ、同情する者もなかった。その場面は次から次へと演じられたし、劇的効果には最良だったが、最後の場面は、当惑させるような不幸と、武勇の美德であった。ロンドンで3週間後に出版された『スコットランドからの手紙』の著者は、このように述べた。すなわち、その乗組員は、

言ってみれば勝利の万歳で歓迎を受けた後で、もっとも鋭く、もっとも厳しい悪口雑言によって侮辱を受けた。処刑の場に來たのだから、よき神よ、ちょうど永遠に向かって旅立とうとする、人生の門出に立った人々をご覧になり、同時に、喜びと共に移送された大勢の者たちを謁見されるのは、なんと感動的な光景なのでしょうか。ある者は、喜びに満ちて尋ねるでしょう。「どうして同郷の人がやって来て、彼らを救助しなかったのか」、また別の人たちは、スコットランドの祈祷者の話をして、懐かしいご主人がすぐに受け入れて下さると告げた。そのどれについても、彼らは、無実の人間、イングランド人、さらにはキリスト教徒のように、比類のない忍耐力で耐え忍び、ただ彼らを許し、彼らの慈悲を求めるだけであった。

グリーンの執行延期に対する希望は、ほとんど最後までなくなることはなかった。絞首刑を行う者が頭巾を彼の頭に被せようとした時には、二度とも彼はそれを脇に押しやり、エディンバラに至る道路に向かって、心配そうに眺めたのであった。そしてそれから、彼は理解した。彼は梯子に躓き、彼に対して顔をしかめたマダーを認めて、がっくりと膝をついた。彼自身のストイックな諦めが、グリーンに死を受け入れる勇気を与えたのだった。

「悲劇は終わった」と、『手紙』は述べた。「そして、小高いエディンバラの多くの場所から、犠牲者たちの身体が、リースの砂の上で揺れるのが見えた。国民の立場からする復讐は、必要以上に満たされたが、真っ先に仲違っていた人たちの多くが、自分たちがやったことについて考えるのを恐れた。」多数ではあったが、最大ではなかったのだ。死者の身体が降ろされた時、ロビンスンはグリーンのをバートリ夫人の宿泊所に運び、そこでは乗り組み人たちが逮捕者たちの前でじっとしていた。彼は女性が衣服を脱がせ、体を清め、納棺する手助けをした。そしてその後で、マダーやシンプスンにも同じことが行なわれた。しかし、彼が棺桶を埋葬の場所まで送り届けた時、再び暴動の火の手が上がったが、彼は、教会の扉のところで引き抜いた剣を手にして群衆と一戦を交えた。

枢密院はウスター号の船員の残りの者に対して、抗議がなくとも罪を減ずることにしたが、スコットランドでは、何の容赦も面目もなかった。身を切るように多くのことが記憶にとどめられた。10 年前に、この国は壮大な商業会社を設立し、その3年後には、世界の交易の枢軸となりえた植民地をダリエンに建設した。9 隻の立派な船舶が、この事業のために建造または購入されたが、沈没させられ、火をつけられ、放棄されてしまった。50 万ポンド・スターリング近くがスコットランドの貧しい財布から快く提供されたが、現在のところ、返ってくる見込みはないと考えられている。2000 名を超える、子どもを含む男女がダリエンを目指してフォース・クライド湾を離れたが、決して戻らなかった。彼らは、パナマに葬られたり、カリブ海の藻くずとなったり、スペインの牢獄に放置されたり、そうでなければ、イング

ランド植民地で年季奉公する奴隷として永遠に行方知れずとなった。ハイランドラインのこちら側のスコットランドでは、この惨事に際して、息子や、父親、従兄弟や、甥や、友人をなくさなかった家族はほとんどなかった。これが、スコットランドがトマス・グリーン、マダー、及びシンプソンを絞首刑にした理由であり、同時に何の容赦もあり得なかった訳であった。

数週間の後、クレイグズ・クロウスにあったジェイムズ・ワトソンの印刷所から、イングランドとその国の海賊に関する混乱を祝う、もう一つのバラードが出来上がった。その名前は、『豚肉を食べる人のための丸薬、またはイングランド人のためのスコットランド風ランセット』と呼ばれた。

それだから、イングランドは、その裏切りに対して哀悼を示すべきだ。

こちら側は、媚びへつらい、盲従を余儀なくされたのだから。

スコットランドの商人は、もはやとがめるべきでない。

ダリエンは、利子をもって弁済されるはずだから。

(原書、10 ページに続く)

### <主要人物人名録>

**アリストン、ロバート船長、バカニア**<17世紀後半にカリブ海で活動したヨーロッパの海賊>。パタースンの友人。クラブ島からダリエンへの最初の遠征で水先案内を務めた。

**アンブロシオ、船長。**ダリエンにおけるインディアンの指導者。スコットランド人の盟友。

**アンドリアス、船長。**インディアンの指導者。スコットランド人を最初に受け入れ、協定によって連携した。

**アーガイル、アーチボルド・キャンブル、第10代伯爵、後に初代公爵、キャンブル族の族長。**国王のしもべ、しかし<スコットランド>会社の大株主。自らの連隊の士官と部下たちが植民地で任務にあたるよう激励した。



**バルフォア, ジェイムズ, 商人。**会社の共同設立者。法令の支持を働きかけた。ロンドンで会社取締役を務める。ロバート・ルイス・スティーヴンスンの先祖。

**ベルヘイヴン, ジョン・ハミルトン, 第2代目男爵。**ロンドンとスコットランドでの会社取締役。議会における会社の熱烈な支持者。

**ベルモント, リチャード・クート, 初代伯爵, ニューヨーク, マサチューセッツ, およびニューハンプシャー総督。**第一回遠征隊の生き残りに対して同情的。しかし、生存者に異を唱えたイングランドによる布告には忠実。

**ブラックウッド, (サー) ロバート, 商人。**会社の共同設立者。バルフォアと共に運動にかかわった。ロンドンで取締役を務めた。

**ボーランド, フランシス尊師。**聖戦者として第二回遠征に携わったが、4名のうち1名しか帰国しなかった。植民地に関する報告書を書いた。

**バイレス, ジェイムズ, 商人。**第二回目の植民地評議員、後にそれを放棄した。トマス・ドラモンドの敵対者、裏切りに対して取締役からの糾弾を受ける。

**キャムブル, フォウナブの。アレグザンダ大佐。**第二次植民地の評議員。ツブガンティでスペインに対して勝利し、降伏には強力に反対した。後に会社の裏切りを告訴。

**キャンブル, コリン大尉。**陸軍士官、後年第一次植民地の評議員に任命された。ペニクックの死後、セイント・アンドルー<号>でジャマイカに行く。

**キャンブル, コリン, 志願乗務員。**ユニコーン<号>でピンカートンの下で修業。日誌をつけた。

**キャンブル, ジェイムズ, 商人。**ロンドンでの会社の代理人。

**カニラ, 将軍。パナマ大統領。**第一次植民地への探検を指導、戦闘なしに引退。第二次植民地の攻撃に際して、ピニエンタに救援を送った。

**カリゾーリ, ドン・ルイ収容所長。**ツブガンティでスペイン民兵軍を指揮。第二次植民への攻撃に成功してピニエンタに合流。

**チーズリー, ジェイムズ, 商人。**会社の共同設立者。パタースンの計画をエディンバラに持ち込む。

**チーズリー, サー・ロバート, エディンバラ市長。**商人でありかつ、会社の取締役。ロンドン重役会の立ち上げに際してのパタースンの主要な代理人。

**カニングム, ジェイムズ少佐。**自ら放棄した第一次植民地の評議員。

**ディエゴ, 船長。**インディアンの指導者。約定によりスコットランドと同盟。

**ドラモンド, ロバート大尉。**ニューヨークからの帰国の旅程をとったカレドニア号の司令官。後年、アフリカへの航海でスピーディ・リターン号を指揮した。次の人物の兄弟。

**ドラモンド, トマス大尉。**かつては、アーガイル連隊の近衛歩兵士官。グレンゴウの大虐殺に参加。第一次植民地の評議員で、ニューヨークからそこに戻る。バイレスと不和となり、投獄された。兄弟の船舶で積荷監督者としてアフリカに渡る。

**アースキン, カーノックの, ジョン大佐。**会社の取締役。ハンブルグでの株式募集の開始のため、グレンイーグルとパタースンと共に派遣される。

**フレッチャー, サルトーンの, アンドルー。**スコットランド愛国者。兵士、著述家、会社の後援者で、パタースンの友人。ライオネル・ウェイファーから会社の為に働くことの要請を受ける。ウォルター・ヘーリーズによる植民地攻撃に応戦した。

**ギブスン, ジェイムズ船長。**ライジング・サン号の所有者、第二次植民地の評議員。会社の取締役で、アムステルダム代理人。カロライナ沿岸で自分の船と共に遭難。

**グリーン, トマス船長。**ウスター号の所有者。会社の船舶スピーディ・リターン号に対する海賊行為とドラモンド一家の殺害の廉で告発される。リースの浜辺で絞首刑となる。

**ガバラ, ドン, メルコールド収容所長。**スペイン人士官として、半島への

最初の攻撃を指揮。植民地の降伏の任務を帯びてピミエンタにより派遣された。

**ホールデイン, グレンイーグルの, ジョン。**会社の取締役, カーノックのアースキンやパタースンと共にハンブルクに派遣された。ジェイムズ・スミスが会社の財産を横領したことを発見。

**ハミルトン, ベイジル卿。**会社の熱烈な後援者。1700 年国王に対する声明を送る。

**ハミルトン, ジェイムズ・ダグラス, 第4代公爵。**議会での会社の後援者。1700 年国会でその擁護を指導。

**ヘーリーズ, ウォルター。**一度はイングランド海軍の軍医だったこともある。ダリエンへの第一次遠征に同行したが, それを放棄してロンドンに戻る。書物で植民地を攻撃。おそらくは, イングランドから金で雇われて, その代弁者となった。

**ホッジス, ジェイムズ, パンフレット作家。**おそらくはハミルトン公爵に雇われて, ヘーリーズの本に対する反撃を書いた。イングランド人に逮捕されたが, 決定的な証拠がないので, 免訴となった。

**ジョリー, ロバート, 船長にして商人。**第一次植民地の評議員。ペニクックと不和となり逮捕。植民地を離れたが, 後年会社によって, その仕事と特権を剥奪される。

**リンジ, ジョン少佐。**おそらくはアーガイル連隊の士官であった。第二次植民地の評議員の中のうだつが上がらない一員。ダリエンで死亡。

**ロング, リチャード船長。**ルーパート号のクエーカー教徒船主。ジェイムズ・ヴァーノンによってスコットランド人の見張りのために派遣される。

**マクドウエル, パトリック。**救援船マーガレット号の積荷監督者。ジャマイカで第二次植民地の生存者を発見。パタースンの友人。日誌を作成。

**マッカイ, ダニエル。**法律家。評議員として第一次遠征隊の航海に携わる。緊急文書を携えて帰国。スピーディ・リターン号で第二次遠征隊に随行。ジャマイカとカレドニア間で, 船から落ちて行方不明。

**マッケンジー、ローデリック。**最初はロンドンで、後にはエディンバラでの会社の書記。イングランド人に対する容赦のない敵対者。会社には申し分のない働きをする。海賊行為でのグリーンの逮捕の原因となった。

**マクリーン、ラホラン船長。**第一次植民地で会社の指導者。自ら会社に攻撃を加えたロンドンに戻る。

**マーチモント、ポウルワースのサー・パトリック・ヒューム、初代公爵。**スコットランド議会での国王の代理。会社の反対者。

**モントゴメリ、ジェイムズ大尉。**エグリントン伯爵の親族。第一次植民地の際の評議会メンバーであって、スペイン人との小競り合いに勝利。ペニクックと不和となり、ジョリーと共にダリエンを離れる。会社によって譴責される。

**ムーン、リチャード。**ジャマイカの船主でパターソンの友人。第一次植民地に食糧を運搬。

**マンロウ、コウル。**ドクター・ジョン。遠征隊の薬品や糧食を整えるため会社に雇われる。第二次遠征隊の出帆を拒否。使い込みで告発される。

**マードク、ウィリアム。**ユニコーン号の最初は航海士であったが、後には司令官。ペニクックに反対してジョリーの側につき、抗議の意味で植民地を去る。

**ナンファン、ジョン。**ニューヨーク副総督。レディ・ベラモントの親類。第一次植民地の生き残りを母国に連れ帰るのを、食糧以外の何がしかの理由で拒否したが、トマス・ドラモンドによって出し抜かれる。

**オズワルド、ロジャ。**志願兵として第一次植民地で従軍。生き残ったが、父親から勘当される。彼の手紙はダリエンでの生活の生き生きとした説明を含む。

**パンミュア、ジェイムズ・モウル、第4代伯爵。**会社の総会の一員。ジャコバイトに共感をもつ。

**パターソン、ウィリアム。**パナマ地峡におけるスコットランド植民地計画の組織者。会社設立法の基礎となる提案を起草。ロンドンとエディンバラ双

方の役員会の取締役。ハンブルグでの会社の使者。スミス・スキャンダルで解任。第一次植民地では評議員として働く。議会の合同に対する熱心な支持者となった。

**パットン, ヘンリ。**ユニコーン号の二等航海士。カリブ海で船を助勢するため招聘されたが、彼は船を放棄。後にジャマイカで逮捕された。

**ペドロ, 船長。**インディアンの指導者, アンプロシオの義理の息子。ターンプルの友人で, ツプガンティでターンプルやフォナブと一戦を交えた。

**ペニクック, ロバート船長。**セイント・アンドルーズ号の司令官, 会社の船団の指揮官, 第一次植民地の評議員の一人。イングランドの海軍士官だったこともあった。誰とでも特にドラモンド一族とは, 仲たがいになった。植民地の放棄後, 水死した。

**ピミエンタ, ドン, ジュアン。**カルタヘナ総督。陸海を通じて第二次植民地への攻撃を組織した。その降伏を受諾した。

**ピンカートン, ロバート船長。**ユニコーン号の司令官で, 第一次評議会の一員であった。ドルフィン号に乗船中, 彼はスペイン人に捕えられ, 19 か月獄中にあった。

**ロウズ, ヒュー。**第一次植民地の事務官や事務員。航海と上陸に関する公式の日誌を作成した。

**リコ, サー・ポール。**ハンブルグにおけるイングランド人駐在員。スコットランド人が, そこで株式募集を開始するのをうまく防いだ。スコットランドの積み荷を内密で調べた。

**サンズ, エドワード船長。**ジャマイカの船主, ムーンの仲間。植民地に食糧を運搬。

**シーフィールド, ジェイムズ・オウグルヴィ, 第4代フィンドレイター伯爵, 第一代シーフィールド伯爵。**スコットランド国務大臣, 国会議長並びに国王代理として, 国王のしもべであり, 会社の主要な敵対者。群衆に屈服して, トマス・グリーンに絞首刑を容認した。

**スミス, ジェイムズ。**ウィリアム・パターソンの友人, ロンドンでの株式

応募者。会社の一取締役、ロンドンで彼は、パターソンから委託された基金を着服した。

**シールド、アレグザンダ尊師。**第二次植民地の聖職者。キャメロン派のチャブレンとしてフランダースに従軍。勇敢な契約派。生き残りの者たちを見殺しにして、ジャマイカに死す。

**スペンス、ベンジャミン。**通訳者として第一次遠征隊と共に船出。キューバでスペイン人に捕虜とされ、スペインに送られ、ピンカートンと共に獄中にあった。

**ストーボ、アレグザンダ尊師。**第二次植民地の聖職者。カロライナでライジング・サン号を放擲、スコットランドには決して戻らず。

**トウィードデイル、ジョン・ヘイ、第二代伯爵、初代侯爵。**スコットランド大法官。国王代理として、1695年に会社創設のための法令を認証。国王により任を解かれる。1697年逝去、その息子が継承。

**トウィードデイル、ジョン・ヘイ。第二代目侯爵。**会社の総会の一員で、パターソンの後援者。

**タリバーディン、ジョン・マリ、伯爵。**1696-98年にかけて、スコットランド国務大臣。ジャコバイトの同調者であるかの疑念を持たれたりもするが、彼は会社の支持者とその敵対者の間を行き来した。

**ターンプル、ロバート中尉。**第一次遠征隊の会社役員。ニューヨークからのトマス・ドラモンドと共にカレドニアに帰還。ツブガンティでフォウナブと共に戦う。ペドロ船長の友人。

**ヴァーノン、ジェイムズ。**イングランドの国務大臣。「ヴァーノン氏線」や、スコットランド植民地に援助や補給を与えるアメリカ農場を禁ずる宣言の考案者。断固として、狡猾な会社の敵対者。

**ヴェッチ、サミュエル大尉。**評判の高い契約派の聖職者の息子。第一次遠征隊で会社の指揮者となった、竜騎兵士官。後年評議員。ドラモンド一族の友人で、ペニクックに対抗した一団の一人。ニューヨークに止まり、会社の資産のいくばくかを接収したと思われる。

**ヴェッチ, ウィリアム大尉。**サミュエルの兄弟。キャメロン派の士官。病気のため評議員として第一次遠征隊に参加できなかった。第二次遠征隊と共に航海をした。フォウナブの忠告を容れずに、スペインに対して植民地を明け渡した。ホープ号に乗船中海上で没した。

**クィーンズベリ, ジェイムズ・ダグラス, 第2代目公爵。**1700年議会における国王の代理。会社の敵対者, 国会で会社の一団が国王に語りかけるのをうまく防止した。ツブガンティの暴動の間は熟睡した。

**ウェイファアー, ライオネル。**バカーニアの軍医。ダリエンでインディアンと生活と労働を共にした。インディアンとその国に関する本を書いたが, その草稿をパターソンは, 取締役たちに渡した。後年会社によって秘かにエディンバラに召喚されたが, 取締役たちが微に入り細に穿って彼に質問した時には, 忘れていた。

### ダリエンの大惨事・関連年表

1693 年	6 月14日	スコットランド議会を『外国貿易振興法』が通過。国王と戦闘状態にないどの国とでも貿易を行うことを目的とする会社の設立を許可。
1695 年	5 月 9 日	スコットランド議会第5会期冒頭, トウィードデイル卿が, 国王は植民地の設置と貿易会社を設立する立法を認可したと布告。 ウィリアム・パターソンによるその法令草稿が, ジェイムズ・チーズリーによってスコットランドにもたらされる。
	6 月15日	その法案がはじめて議会で提示され, 交易委員会に委ねられる。
	6 月26日	トウィードデイル卿, その法令を承認し, それに裁可を与える。
	8 月29日	ロンドンで, 「その会社に関わる議員」による第一回目の定例会。

- 11月13日 アフリカ、インド方面と貿易するスコットランド会社の株式募集がロンドンで始まる。総額 30 万ポンドの募集。
- 12月 3 日 上院、スコットランド法を討議。
- 12月 5 日 会社のロンドン取締役たちが、上院への出席を命じられる。
- 12月17日 上院と下院が国王の所に赴き、スコットランド会社への抗議を表明。  
ウィリアム 3 世は、「スコットランドには不釣り合いだ」と明言。
- 1696 年      1 月      ロンドンの取締役たちが上院委員会による取り調べを受ける。上院は彼らの弾劾を要求。応募者が撤回。  
イングランドの事業が崩壊。ウィリアム・パターソン、スコットランドへ。
- 2月26日 会社はエディンバラで株式募集を開始。スコットランドで提案された資本金は 40 万ポンドであった。株の募集に応ずる者が殺到。
- 7月23日 パターソンはダリエンに関する書類のすべてを会社に委ねる。地峡における交易の拠点を提案。
- 8月 1 日 株式の募集締切。資金は提案額に到達。当座資金の確保。
- 10月      パターソンはハンブルグでの株式募集の開始のために出発。  
ジェイムズ・スミスがパターソンから委託された資金を横領。
- 1697 年      1 月      パターソンはアースキンやホールデインと依然アムステルダムに滞在。会社に対するオランダ人の関心を惹くのに失敗。
- 2 月      パターソンとアースキンはハンブルグに向けて出発。
- 4 月      ハンブルグで株式募集を開始する最後の努力。イングランド駐在員ボール・リコにより挫折させられる。
- 9 月      パターソンは会社の特別委員会による取り調べを受ける。スミスの横領に共謀した件では無罪放免。しかし、会社の職務は剥奪。
- 11月      会社の船団がフォース湾に集結。カレドニア号、セント・アンドルーズ号、ユニコーン号らに、後にエンデヴァー号とドルフィン号が合流。



- |        |              |  |
|--------|--------------|--|
| 1698 年 | 1 月から<br>6 月 | 船舶に装備が整えられ, 荷物が積みこまれる。<br>評議員, 事務員, 入植者が選考される。                                 |
|        | 7 月14日       | 第一次遠征隊がリースを出発, カコーディに停泊。   |
|        | 7 月19日       | 船団がカコーディから北に出帆する。  |
|        | 8 月26日       | 船舶は全隻無事マデイラに到着。  |
|        | 9 月 2 日      | 船団がマデイラを出発。  |
|        | 9 月28日       | 西インドへの最初の上陸。   |
|        | 10月 3 日      | 評議会が会社の名においてクラブ島を領有。   |
|        | 10月 7 日      | 船団はダリエンをめざして出帆。  |
|        | 11月 2 日      | カレドニア湾への最初の上陸。   |
|        | 11月 5 日      | 疫病が蔓延。地面を清掃して小屋を建てるべく多数が上陸。  |
|        | 11月15日       | ルーパート号でリチャード・ロングが到着。   |
|        | 12月 4 日      | アンドレアス大佐との友好協定。  |
|        | 12月11日       | モーレバス号の到着。   |
|        | 12月28日       | 一行はスコットランド会社の植民地を宣言。   |
|        | 12月29日       | アレクザンダ・ハミルトン, 緊急文書, 日誌などを携えてスコットランドに出発。カニングム少佐も植民地を出発。                         |
| 1699 年 | 1 月          | バリアヴェント船団がポートベロに停泊。スペイン総督スコットランド人追放の手立てを考慮。<br>緊急文書, 補給品と共にリースを出発, アイレイ島沿岸で遭難。 |
|        | 2 月 5 日      | ロバート・ピンカートンが乗船するドルフィン号, カルタヘナに進み, 岩礁に衝突, スペイン人により拿捕。                           |
|        | 2 月 6 日      | モントゴメリーの小競り合い。パナマ大統領, カニラ將軍, 植民地に対する攻撃を放棄。                                     |
|        | 3 月11日       | 評議会はマハイ中尉をカルタヘナに派遣, ピンカートンとその乗務員の投獄に対して抗議。                                     |
|        | 3 月25日       | アレクザンダ・ハミルトンがエディンバラに到着。  |
|        | 4 月10日       | ダニエル・マッカイ, エディンバラへの緊急文書を携え, 植民地を出発。  |
|        | 4 月21日       | ロバート・ジョリー, ジェイムズ・モントゴメリー, ウィリアム・マードックら植民地を離れる。                                 |

- 5月       オリーヴ・ブランチ号、ハウプフル・ビニング号、クライド川から、食糧と300名の男女を乗せて出帆。
- 5月18日   植民地に、イングランドで植民地に不賛成の布告が出たと伝わる。  
評議会は植民地放棄に備える。
- 6月22日   カレドニアは、病人6名を除いて全面放棄となる。
- 7月       カレドニアを離れてすぐエンデヴァー号が沈没。セント・アンドルーズ号はジャマイカに到着。
- 8月4日   カレドニア号がニューヨークに到着。
- 8月14日   ユニコーン号がニューヨークに到着。
- 8月18日   第二次遠征隊がクライド川から出帆、ロウジ湾で再び停泊、順風を待つ。
- 9月22日   ダニエル・マッカイ、第二次遠征隊に合流するため、エディンバラを出発、クライド川に向かう。マッカイは琐事として却下したが、植民地放棄の風評もあった。
- 9月23日   第二次遠征隊、マッカイも予備の食料も待たず、出帆。
- 10月9日   放棄の風評が、ニューヨークからの書状によって確認される。
- 10月12日   カレドニア号がニューヨークを出帆。  
フォウナブのアレクザンダ・キャンブル、カリブ海や植民地までの船を見つけるためスコットランドを出発、イングランドに向かう。  
会社の総会は、国王に対して保護を求め、会社名でも声明を送るべく国会に請願することで合意。  
ダニエル・マッカイ、スピーディ・リターン号で植民地に向かう。
- 11月21日   カレドニア号、クライド川に到着。
- 11月30日   第二次遠征隊が植民地に到着。トマス・ドラモンドと2艘のスループ船を発見。
- 12月  
4-5日   評議会と全職員による会合の結果合意がなされ、500名の男性と女性全員をジャマイカに送還することになる。
- 12月12日   国王は、提示されたすべての声明の否認を表明、スコットランドの枢密院に国王の不満を周知するよう命ずる。
- 12月20日   アレクザンダ・キャンブル、叛乱を理由に絞首刑。

- 12月21日    トマス・ドラモンド, バイレスにより捕縛, 船中のハミルトン公を収監。
- 1700 年    1 月10日    国王, ドルフィン号乗務員の解放をスペインに要請するのに合意。  
ロバート・ターンブル, スペインによる計り知れない攻撃の知らせを持って, インド諸島巡視から戻る。
- 2 月 7 日    バイレス, 植民地を放棄。
- 2 月11日    フォウナブのキャンブルの到着。
- 2 月15日    フォウナブ, ツブガンティでスペイン人を破る。
- 2 月23日    スペイン船が, 湾の入り口近辺に出没。
- 2 月27日    トマス・ドラモンド植民地を放棄。
- 3 月 1 日    ドン・メルコー・ド・ゲバラ, 地峡の東に上陸, スコットランド攻撃に転ずる。
- 3 月 3 日    ドン・ジュアン・ピミエンタこれまで以上の人員で上陸。彼はスコットランド人に降伏を招請。拒否の場合は, 半島の地峡部分に向けて進軍する。
- 3 月 5 日    マーガレット号, 食糧と必需品を携えて植民地に向かう。積み荷監督者パトリック・マクドウェル, 書状を携行。
- 3 月18日    スペインは地峡の水路を渡り, 要塞をめざして進軍。評議会は条件を要求。
- 3 月22日    停戦が終了し, 戦闘は継続。
- 3 月25日    ロンドンで, 会社の総会の 4 名が国王に対する声明を提示。国王は会社に対し, 会社の不満に関わることで国王の言うべきはすべて申し伝えた, と述べた。
- 3 月30日    ピミエンタ, 再度, スコットランドとの条約を申し出た。
- 3 月31日    降伏文書の各項目に署名。スコットランド人は 2 週間以内に, 船舶, 銃, 必需品と共に立ち去らねばならない。
- 4 月 1 日    トマス・ドラモンドが植民地に戻る。
- 4 月12日    植民地は 2 度目に放棄される。ピミエンタがそこを占領。  
ホウブ・オブ・ボーンズ号がカルタヘナに向けて出帆。船長は, 船をスペインに明け渡す。
- 5 月        ライジング・サン号, ハミルトン公号, それにホウブ号が

- ジャマイカに到着，ブルーフィールド沖で停泊。
- 5月24日 スコットランド議会開催，国王代理のクィーンズベリ公，会社の一団が国王への声明を強要するのを妨害。国会を30日まで延期。
- 6月20日 ツプガンティでの新たな勝利がエディンバラに届く。暴動が発生。群衆が当夜その都市を支配下に置く。
- 6月28日 ニューヨークからの書簡によると，会社は第二次植民地を放棄。
- 7月21日 次々と船がジャマイカを離れる。  
/22日 ホウプ号が，キューバ沿岸を離れた直後遭難。
- 8月14日 ライジング・サン号，フロリダ湾で強風によりマストを喪失，北方に帆走。
- 8月20日 ハミルトン公号とライジング・サン号，カロライナのチャールストンに到着。  
/24日
- 9月3日 2隻ともにハリケーンで沈没。
- 9月20日 ピンカートンと3名の捕虜がセルヴィアで牢獄から解放。
- 10月29日 スコットランド議会再開。会社の一団，ダリエン植民地の合法性，議会の保護資格を宣言する戦いを開始。
- 1701年 5月 スピーディ・リターン号とコンテンツ号が，アフリカ沿岸での交易のために派遣される。
- 1703年 この年の終わり，現在は海賊ジョン・ボウエンの持ち物となっている，スピーディ・リターン号とコンテンツ号が，マラバル沿岸を離れた所で破壊される。
- 1704年 1月31日 会社公認の船舶アナンデイル号，東インド会社の扇動によりダウンスで捕獲。  
8月12日 ウスター号がリースの砂浜で，アナンデイル号の報復として拿捕される。
- 1705年 4月11日 ウスター号の船長トマス・グリーンは，スピーディ・リターン号に対して海賊行為をはたらいたことが有罪とみなされ，

その航海士や砲手と共にリースの砂浜で絞首刑となる。

1707 年      5 月 1 日      スコットランドとイングランドの 2 つの王国に合邦条約が効  
力を発揮。第 15 項によってスコットランド会社は消失。

(わたなべ・くにひろ／奈良産業大学地域公共学総合研究所教授／2012年10月31日受理)